

デュシェンヌ型筋ジストロフィー患者の歩行可能期における側彎症有病率の検討

立石 貴之^{†1)} 松井 彩乃²⁾ 小牧 宏文³⁾ 佐藤 福志¹⁾ 齋藤 亘⁴⁾ 早乙女 貴子⁵⁾

IRYO Vol. 74 No. 6 (261-266) 2020

要 旨

(目的) 国立精神・神経医療研究センター病院 (当院) 身体リハビリテーション科を受診した歩行可能期のデュシェンヌ型筋ジストロフィー (Duchenne muscular dystrophy : DMD) 患者を対象に側彎症有病率を調査し、側彎症の有無および側彎症を認めた患者の脊柱変形凹凸側の2群間で身体機能を比較すること。(方法) 7歳以上で10 m以上の歩行が可能なDMD患者38名を対象とし、座位での全脊柱X線画像を基に側彎症有病率を調べた。側彎症の有無、脊柱変形凹凸側の2群間で機能障害度分類、筋力、関節可動域、利き手等の身体機能を比較した。(結果) 側彎症有病率は30.8%であった。機能障害度分類では側彎症のある患者の方が、運動機能が低下している傾向があった。側彎症の有無、脊柱変形の凹凸側の2群間で身体機能のすべての評価項目に有意差はなかった。(考察) DMD患者の側彎症は歩行能力喪失前の歩行可能期でも発症することと、側彎症と運動機能低下に関連性がある可能性が示唆された。筋力や両下肢関節可動域、その左右差、利き手側の違いが歩行可能期の側彎症発症および脊柱変形凹凸側に影響を及ぼすと予想したが、解析の結果、関連性は明らかではなかった。(結論) DMD患者の側彎症は歩行能力喪失前でも発症するため、歩行可能期から側彎症発症や進行に対処することを目的としたリハ専門職による定期的な介入が必要であることが示唆された。

キーワード デュシェンヌ型筋ジストロフィー、歩行可能期、側彎症

はじめに

デュシェンヌ型筋ジストロフィー (Duchenne

muscular dystrophy : DMD) 患者における側彎症は、胸郭変形による呼吸機能低下、日常生活活動能力の低下、quality of lifeの低下の原因となるため、

1) 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院 身体リハビリテーション科 (*現 国立病院機構埼玉病院 リハビリテーション科), 2) 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院 整形外科, 3) 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター トランスレーショナル・メディカルセンター, 4) 北里大学医学部 整形外科学, 5) 東京都立神経病院 リハビリテーション科 †理学療法士

著者連絡先: 立石 貴之 国立病院機構埼玉病院 リハビリテーション科 〒351-0102 埼玉県和光市諏訪2-1

e-mail : tateishi.takayuki.yx@mail.hosp.go.jp

(2019年5月20日受付, 2020年3月13日)

The Prevalence of Scoliosis in Ambulatory Duchenne Muscular Dystrophy Patients

Takayuki Tateishi^{1) *}, Ayano Matsui²⁾, Hirofumi Komaki³⁾, Fukushi Sato¹⁾, Wataru Saito⁴⁾ and Takako Saotome⁵⁾,

1) Department of Physical Rehabilitation, National Center of Neurology and Psychiatry (* Present address : NHO

Saitama Hospital), 2) Department of Orthopedic Surgery, National Center of Neurology and Psychiatry, 3)

Translational Medical Center, National Center of Neurology and Psychiatry, 4) Kitasato University School of

Medicine, 5) Tokyo Metropolitan Neurological Hospital

(Received May 20, 2019, Accepted Mar.13, 2020)

Key Word : Duchenne muscular dystrophy, ambulant, scoliosis